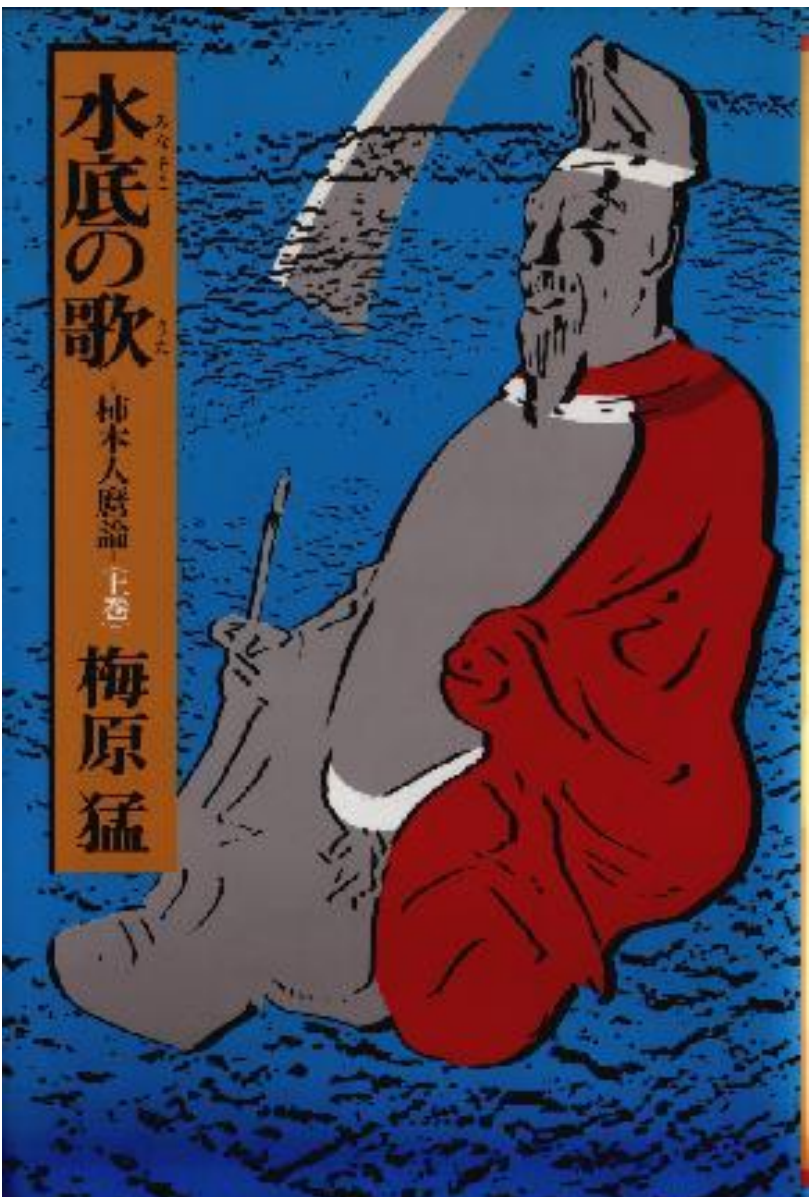


(1) 切実とはいえない動機と方法論

今回私がもくろんだ小旅行は、山口を通って石州津和野に入り、益田へ至る山陰、島根の旅である。最終目的は益田市、この地で刑死したとされる万葉歌人柿の本人麻呂（人丸）の終焉の地を見たく思ったことにはじまった。これは結構古くから浮き沈みした願望で、思えばかれこれ二十年は経っている。さて、まず人麻呂のことから書かねばならない。



梅原猛氏の「水底の歌」上、下巻（新潮社刊S46初版、私はS56年版で読んだ）を読まれたかたはそのミステリータッチの古代彷徨に痺れただろうと思う。万葉集中の代表的な歌人、というより日本文学史上で最大最高の詩人人麻呂の死に関する、一般常識を覆す驚くべき内容を力強い文章で綴った歴史物語り。私もあの膨大な全巻をそんな興味に惹かれて一気に読了した。それはやはり既成概念と既製の権威が音を立てて崩壊する時の痛快さ、小気味のよさも含む大冒険思想小説ともいえる楽しさだった。しかもそれがフィクションでなく、多くの様々な資料と哲学者である氏一流の緻密かつ大胆な考証とに裏打ちされた推論の連鎖から画期的な結論にいたる本格重厚な論文なのだから、読者をこの上なく興奮させたのも当然だった。

人麻呂については万葉集の歌人として知られるだけで、その伝は未詳、名前は史書にもない（平凡社世百科事典、72発行版）。近世最大の人麿伝として権威の書である斎藤茂吉の「鴨山考」に

よれば、人麿は下級の官吏として任期中に石見の国で病死し、山あいには葬られたという。この説は賀茂真淵などの正統的な人麻呂研究の延長線上にあった。

しかし、梅原氏は人麻呂の多くの作品、特に彼が死に臨んで詠んだ句、そして彼の死を悼んだ身内が詠んだ句、さらには後世の歌集に見る人麻呂の扱ひ（たとえば貫之が書いた古今和歌集の序）などを詳細に検討し、解釈しなおし、また彼の全国に散らばって残されてある奇妙な伝承などを吟味し、この千三百年前の古代日本の正史にかかわる大きな謎のひとつを明快に解き明かして見せた。つまり、人麻呂は従来の定説だった下級地方官吏などではなく、任地で病死したわけでもなく、もっと上級の中央文官であり、宮中での何らかのごたごたに巻き込まれ、罪を得て追放され、地方へ流されて、ついには石見の国の鴨山という島から海へ投げ込まれるという無残な刑でその生を断たれたという。

「死刑全書（原書房，96刊）には溺死刑として

首に重りをくくりつけて水に沈める（古代ローマ）、皮袋に詰めて（もちろん生きてたまま、蛇、蠍、ねずみなどを一緒にすることもあった）川に流す方法（イスラム）などが歴史上存在したと書かれている。しかし日本でそのようなことが行われていたということを知れない。市井のやくざ同士のリンチとして、ひとを簀巻きにして水へ投げ入れる記述を読んだことがあるけれど、公の刑罰としてはなかったろう。稀代の大歌人を世から抹殺し去った刑はどんなものだったのか。そんな残酷な刑に等価する、どのような大罪を歌人は犯したのか。

島としての鴨山は後年の津波か何かで海中に没したという。しかし、私はこの本を読むうちに、人麻呂への興味とともに、その最期の地となった場所に立ってみたい、あるいは眺めてみたいという強い誘惑にかられた。どうせ何のこともない日本海の風景しかないだろうとは想像されたけれど、その思いはずっと内向したまま時々思い出したように私の旅への誘惑を突き上げた。

とはいえ、これほど長らく実現しなかったほどに、益田は遠い地ではないし、島根はひとつ山口県を挟んだ近県である。たいした大事業でもないように思える。結局、旅への動機としてはさほど切実でもなかったのだらう（他人事のように言うが）。しかし、私も年を食って、いずれ行けるだらうと思っているうちに足腰が弱って行けなくなってしまうかも、と危惧する年代に差し掛かり、ようやく決断した。やるとなれば小さな旅でも、こつてりと旅らしい旅を試してみよう。

「ひととは様々な理由から旅に出るであらう」という書き出しで、哲学者の三木清はその著「人生論ノート」の中で「旅について」という考察をはじめた。これを国語教科書で読んだのはいつだったか。どんな文章が後に続いたのか、当の本が身边にはないので読み返すこともなくうる覚えのままここに書いているのだけれど、最後の結論のようなもの、「旅は人生そのものなのだ」という一言は今もよく覚えていてる。そのころは方丈記も、

奥の細道も当然知らなかったし、やはりこの中で（注釈の中だろうか）紹介されてあったので知ることになったのだらうと思う。へえ、たかが旅行ひとつについて、これだけあれこれぐちゃぐちゃ考えて、書くひともいるんだー。というような軽い驚きを覚えたことも思い出す。ま、それが哲学というものなのだ、と気がついたのは随分あとになってからだ。

昨今のレジャーブームとしての旅行と、三木清の言う「人生にも比べられる旅」とは、何か違うような気もする。というのが、人生の旅の終着点は死であって、そのこと自体はみな一緒なのだし、そこへ到る過程に様々あって、やっぱり同じ死ぬなら、途中で愉しもうや、とかいう結論を導き出すのも道理である。三木清はそれを、旅は解放と自由の時間であると定義していたようだけれど、まさに、わたしたちは知る、知らぬにかかわらず、人生において自由なのだ。それを意識している人間だけがよりよい人生を生きるのだらう。

昔の旅は、当然ながら途中の過程で楽しみもした

だろうけれど、大変苦勞もした。いや、苦勞が殆どだったろう。歩くか、例の庶民レジャー旅行チームのさきがけとなったお伊勢参りだって、せいぜい一部が船旅で、かかる時間、日数の膨大さに加えて途中での苦勞、災難の可能性は随分高かったわけで、そんな江戸時代以前の旅を踏まえて三木清は「人生は旅である」とかいつているのだらう。

昨今の新幹線、飛行機の旅、もちろんバスツアーなども、途中で乗り物酔いに苦しまない限り、至って楽しい宴会の延長のような旅行を愉しむことが出来る。つまり点と点、華やかな旅行先Ⅱレジャーランドと灰色地の生活空間を繋ぐワープ、空間移動の娯楽なのだ。これは「人生の旅」なんかとは全く違ったものだよね。

とはいっても、いまさら歩いて長距離旅行するもの好きは皆無だろう。目的地があつて、それは日本国内とはいってもやっぱり歩いていけば随分時間が掛かる。せつかくの交通機関を利用しない手はない。自動車はなかなか便利なツールだけ

ど、それなりに危険も多いし、高速道路は金がかかり、地の道を走ればまた交通信号が多くて歩くのと大差ない時間がかかる。

ここに宮脇俊三といわれた天才が出て、在来線鉄道の旅の醍醐味を宣伝された。氏はもうすっかり旅を終えて、世にはいらっしやらないけれど、現代の旅というものをそれなりに魅らせた大家であつた。つまり、この便利な時代にあつて、旅行というものを本質的に捉え、精一杯旅を旅として楽しもうとされたのだ。

鉄道在来線による旅行は、新幹線、飛行機、バスツアーなどに対置する、地を這い、旅程の眺めを楽しみ、ローカルの人々との接触と交流も可能な、実に旅行らしい旅行、旅の過程そのものを現代人として精一杯愉しむことのできる旅なのだ。それが「人生の旅」といえるほど重みのある旅なのかは、さておくとして。

くだらぬまくらが長すぎた。誰もあきれてここまですら読んではくれないだろうが、ともかく、今回の私の小さな一泊貧乏旅行は鉄道で、それも全



部JR在来線、各駅停車の旅としよう、と決めたのである。ぶっちゃけていえば、

財布の都合上そうなったのだけれど、ここまで理由付けをすれば少しは格好もつくだろう。現代に可能な旅らしい旅、宮脇イストとしての精一杯の旅の楽しみを味わいたいということだ。何にせよ、出発するまでに、ここまで回りくどく書くことはなかつたらうけれど、しかし、もう書いた以上消すことはしないで置こうと思う。わずかの読者であれ一分の理を感じ取っていただければ書きがいてもあろうというものだから。

## (2) 蹉跌のある出発 (たびだち)

11月3日からの連休初日、自宅から十分ほどのJRバス亭から出る6時58発直方駅行きに乗る積もりが、いつもになく寝坊して、7時10分に愛車(オデッセイ、07年式)で駅へ直接向かう羽目になったのは、朝刊を配達して6時00までには戻る長男の帰宅がいつになく遅れたせいである(ひとのせいにするな)。目覚めるの

も遅かったけれど、こんな（長男がこんな時間まで戻らない）ことは珍しいことだ。何か椿事でもあったのなら、旅行どころではなくなるので、彼が戻るまでは出るに出られなかったというのが正確なところだ。彼は6時30を過ぎて帰ってきた。計画は変更を余儀なくされたけれど、家族に何事もなかったのは、よしとせねばならぬだろう。例によって、

「なんで一人だけで旅行なんかして、楽しいのかねえ……」と呆れるでもなくやつかみでもなくぼやく女房にさりげなく束の間の別離を言い渡して、私ははればれとひとり旅上のひとになった。

駅近くの一日500円の駐車場に車を置き、駅に着いたのが7時35。結局JRバスと差のない

駅到着となった。みどりの窓口で、山口線經由で山陰本線益田まで、といって乗車券を買った。特急券はいりませんか？と聞かれ



たのでいらないと答えると、ははあ、では各駅停車で行かれるのですね、と笑いながら切符を作ってくれた。別に嫌味は感じられなかったけれど、私の汚いバックパックと普段着の風体を見て、それなりの旅をするのだろうと推察したのだろうことは理解できた。ま、金がないことは事実だけれど、接客業としては、いわずもがなのことは言わない方が一般に（仏様から短気ものまで幅の広い客の気分を考えれば）いいのではないかと思う。もちろん私自身は趣味でやっているのだし、駅員氏もそのように、粹でやっているのだろうとか解釈されたのだろうと解釈することも充分可能なだけけれど。

7時46分の快速で終点小倉へ向かう。福北ゆたか線は二年前に電化を完成した。早くなっただし、車両も綺麗になった。しかし、私などはこの名称が余り気に入らない。ふくほくというのが不自然な音で言いにくいし、ゆたかというひらがなも変にわざとらしい。どうして筑豊本線ではいけないのだろう。8時37小倉着。

ひとつやり過ぎて、日豊線から来る小倉発山

陽本線新山口行の9時11発を待つ。同じホームから特急いそかぜ、山陰本線川棚、長門市、東萩經由益田行が出る。新幹線を利用しなかったら、益田へ行くにはこれが一番速いだろう。1時59益田着だと。しかし私はもう山口線經由というチケットを買ってしまった。山陽本線、山口線經由で乗り継ぐ私の計画では、益田には13字39着になる。一時間四十分の遅れだけ、ともかく今回はローカルダイヤに徹する積もりなのだ。



「いそかぜ」は偉大なるローカル本線山陰線を走る数少ない特急なのであり、益田からはスーパーまつかぜ、更にその終点鳥取からは在来線を乗り継いで、京都に着くのは20時36という計画が可能である（山陽新幹線のぞみ8号なら小倉8時41発京都11時09着）。そのけなげな勇姿を

わがデジカメで撮った。驚いたことに、私が撮ったあと、堰を切ったようにカメラマン（カメラパーソン）たちがやってきて同じ先頭車両とエンブレムを撮り始め、その数7、八名に達した。最後は車椅子の若い男性写真家が締めくくった。

賑やかな若い西洋人の男女仲間五名が我々の9時11発に同乗してきた。女性も三人、皆大柄で、姿もよく、我々の尺度では美女ばかりだった。

なぜ西洋婦人には格好いい美人が多いのだろうか。目が大きいとか鼻が高いとか、そんな特徴を持つ西洋婦人を誰かが美人と規定したからだろうか。たまたまそれがグローバルスタンダードになった？うん、そうに違いない。ジーンズやらTシャツやらカジュアルな服装で底抜けに明るい面々だった。彼女たちは何者なのか。この東方の異国の日常にすっかり溶け込んで、この、世界にも稀な利便さと安全な社会と公共物を当然のように享受しているように見える彼女たちは、どんな感情にかられて旅をしているのだらう。少なくともこの国の雰囲気気が気に入らないふうではなさ

そうだけれど。

門司を出た車両は関門鉄道トンネルへかなりのスピードで入っていく。この前乗った時はもっとゆっくり入っていたような記憶があった。アップト式軌道で上下したような記憶さえあったのだから、記憶というのはいいかげんなものだ。高校での修学旅行も含めて人生中で四度か五度（？）目の経験（前回は三年前、札幌への鉄道旅行。三十年ぶりだった）。関門橋はその十倍は通っただろう。既に車中毒が硬膏に入っていたということだ。国道トンネルは、関門橋が出来る以前のことだけれど、何度くぐっただろうか（5, 6回?）。歩き（国道トンネルは上に人道もある）は往復一回だけだ。下関9時25着。5分待ちで新山口行に乗り換え。山陽本線を走り出す。

（3）大いなる旅の友、メルヴィル

こんなな一人旅の通例として、私は今回も大きい本を携えてきた。大きいといっても内容が大きい

(重い) という意味で、文庫本だけれど、[ハーマン・メルヴィル「白鯨」田中西二郎訳新潮文庫版](#)。

最初の鯨づくし(鯨の語源百科)をかつての鯨王国下関あたりで読むのも単なる偶然か。

人間はさまざまな事物に名前を付けていった。それこそ何かから何まで名前を付けていった。

名前を付ければそれでそのものを理解したような気分になったのだろう。人間が最初に鯨を見たときは、それこそ驚いたことだろう。世界最大の動物。人間は決して海のいきみものではなかったから、それらを発見するのは(象、マンモスなんかよりも)かなりあとになってからではなかっただろうか。マンモスが人間(穴居人)共の餌食となつて死に絶えたのはもうほとんど定説だけれど、この海の巨獣が、やはり人間の餌食となつて絶滅に瀕した歴史があったということは、人間というけだもの、生物種の、あるめちやくちやな、常識では捉えられない破天荒な一面、あるいは悪魔的な、ばけもののような存在をよく現しているとはいえないだろうか。なぜ人間はそれほどまでに、自身の生命をもいとわず破壊と破滅へつきすすむ

精神の力（悪くいえば狂気）を帯びるのか。それほど人間は傲慢になれるのはなぜなのか。メルヴィルの「白鯨」、あるいはその創造物であり、主人公である「エイハブ船長」の生きざまに興味を持ったのが、私のこの小説に向かわせた動機だといえばいえるだろう。

ホエールの語源はスエーデン、およびデエニツシユ語の「丸い体、或いは水中に起伏翻転すること」から名づけられたとある。しかし、デエニツシユとは何語なのか。旅先で本を読むとこんなことが分からないまま読み進まねばならないつらさがある。

随分昔、NHKラジオに世界文学の朗読番組があった。この名作が読まれていたことがあった。朗読の声優（アナウンサーではなかった）がなにか苦味走った巻き舌めく不敵な男性の声、読みぶりで、私は最初の「ハーマン・メルヴィル（作?）」、「白鯨」という出だしを聞くのが愉しみだった。（もつとも、内容はまったく記憶にないけれど）あの声優、誰だったろうか？



この、読書の達人S・モームが世界十大小説のひとつに規定した長編小説も、随分以前に読もうと思つて購入したまま書棚のかざりになって、なかなか果たせないでいた。結構長い（上下巻全一三五章とエピローグ）全巻（上下を持参した）をこの旅で全部読めなくても、読み続けられるきつかけだけでも得られれば良いと思う。

小説はまだその第一章にもならない。延々と文献抄が続く。著者はずいぶん図書館に籠つて様々な鯨関係の本を読み漁つたのだらう。メルヴィルのこの作品に対する意気込みが感じられる。

「神、大いなる鯨をつくりたまへり」という聖書の言葉から始まる、様々な書中にあらわれた鯨についての著述。ずいぶんあるものだと感心する。昔はインターネットもPCもなかったから、これらを索引から見つけ出すのは至難のわざだったはずだ。メルヴィルの博学なことを素直に驚くべきだらう。それとも、この人々の日常生活に簡単に現れるはずもない海獣への人間のただならぬ関心の強さを思うべきなのだらうか。ハムレット

にもあつたらしい「ほんに鯨のやうな」。こんなところではハムレットを参照することはできな  
いけれど、これは巨大な何物かを暗示しているの  
だらうか。

山陽本線を走る列車は既に「うべ」を過ぎた。向  
かい隣の席の西洋人美女二人はあまり気が合わ  
ないのか話はずまない。そのうち窓際の方はニ  
ットのセーターを頭からかぶって眠ってしまった。  
た。正面のおっさんの厚顔無遠慮な視線をはじめ、  
周囲からじろじろ見られるのに辟易したのかも  
しれない。もつとも、天気がよくて直射日光を避  
ける意味もあるのかも、とも思える。ふと思いた  
って「携帯全国時刻表一二月版」を出す。次の乗  
り換えの時刻を確かめる。新山口10時35着。  
山口線あたりを繰っていると、あれ、10時37  
津和野行き快速「SLやまぐち号」とあるではな  
いか！。限定ながら運転日も合致している。どう  
してこれに気がつかなかったのか。たった2分の  
乗り換え時間だから、無理かもしれないと思いつ  
つやってきた車掌さんに聞いてみる。「2分……」

（正確には3分以上だろう。当電車が駅を“発車する”時間から計算した2分がSLの新山口駅に存在する時間なのだ。）とちよつと絶句したあと、「乗れますよ、席が空いていたらね」と軽く言うて去っていった。

なるほど、やまぐち号は全席指定である。

#### 4) SL、津和野



山口線のSLが話題になったのはずいぶん昔のことだし、私も、まだ走っていたとは知らなかったというのが正直なところで、おそらくブームは昔のこととで、当日走りこんでも席は空いているだろう、と勝手に決め込んでしまい、私は「白鯨」上巻を仕舞って

乗り換えの準備を始めた。電車はやがて新山口に着いた。目的の列車は跨線橋を渡った改札口前の

1番ホームだ。子供を抱いて走り始める家族もいて騒然たる雰囲気。私もつられて自分の体力を瀕踏みしつつ、階段を走って上がる。5、6両もの大正風ゴージャスな雰囲気の客車が並んでいる。ホームには見送りのひとびとだらうか、駅員、車掌、駅長らしきひとまじえ、何人も乗車口に立っていてなんとなく乗りにくい感じ。乗ってしまったおうかとも思ったが、念のため駅員の一人に、乗っていいですか？と聞いてみる。とんでもない！といった目つきを眼鏡の奥に見て、やばいか、と思った。

「満員ですよ、乗れません。」  
すぐ大層な汽笛の出発信号がホームいっぱいにとどろき渡った。そうだ、カメラ、カメラ。乗れないと決まったら、せめて写真にでも撮っておこう。また私はホームを先頭の機関車の方へ向かって走りだした。SLは新幹線のようにすると走り出しはしない。まだまだ時間があるはずだ。しかし、小倉での「いそかぜ」の比ではないカメラファンの集団が私を待ち構えて、いやSLの出发を遅しと待ち構えていて、なかなか良いアング

ルを提供してくれない。一枚も満足なものが撮れないうちに、さすがのSLも痺れを切らすように動き出し、出て行ってしまった。

そのにぎやかなSLを追うようにして次発の快速デizer車山口行きが出て行ったのだけれど、私はここで活躍しすぎて、気が抜け、いささかぼんやりしていたので、それに乗り遅れてしまった。それで、結局当初の計画通り、11時05新山口発で益田へ向かうことにした。私がからんとしたそのデizer客車に席を占めたすぐあと、例の外入グループが乗り込んできた。あれ、またご一緒ですか。ひよつとすると、彼女らも益田へ人麻呂を探しにいくのか？粗末な英語だけれど、ちよつと話し掛けてみたい誘惑にかられた。しかし今回、彼女たちは別の車両へ移っていった。しかし、新山口とは聞きなれぬ駅名だ。先刻から気にはなっていた。ここが新幹線のための新駅なのか？くらいの関心しかなかったのだけれど、列車が動き始めてようやくここが何者だったのかがわかった。小郡（おごおり）駅。ホームを出る間際に古くも新しい（ペンキを塗りなおした）そ

の旧駅名標が目に入ったからだ。この山陽本線のローカル駅を意識することはこれまでなかったけれど、新幹線の小郡駅を通過することはしよつちゆうだった。その新幹線駅が新山口駅になったのだ。在来線の駅名も自動的にそうならざるを得なかったのだらう。これは町村合併や公共事業合理化が強力に、強引に推進されていく世の流れのひとつだらうか。県庁所在地である山口市と小郡町との格の差はかくれもないけれど、せつかくの既得権益である新幹線駅名を失い、その県都の一出張所、あるいは飛び地になりしまった小郡町民の無念さはわかるような気がした。

山口線を走るのは初めてなので、沿線の風景に目がいく。ずっと素朴な日本の秋の農村風景だ。それは湯田温泉から山口県の心臓部山口へ至るころもさほど変わらない。

山口市は確か、県では三番目以下の人口、県庁所在地としては全国でも小さめの都市だったはずだ。むしろ山陽本線の沿線のほうが現代的で工業地帯も集中しているように思う。やはり山口県の

中心都市は下関なのか、とか思ってしまった。もちろん観光立地に山口は県都として率先して実力を発揮している。温泉もあるし、多くのねたがある。私も数度訪れた（車で）。そのこぎつぱりした県都の駅を過ぎ、左の窓に長門峡の紅葉が広がった。車の堵列もずいぶん多かった。まだここは来ていない。初めて見る景色だった。中原中也の詩を思い出す。

列車は山あいに入っていた。山口県から島根への県境に近づく。トンネルに入るたびに窓を閉めてくださいとアナウンスがある。先行したSLがふりまいた煙が構内に立ち込めて、開いた窓から侵入するのだ。これは私が学生だった昔の汽車旅行ではおなじみの現象だった。窓を閉め遅れてえらい目にあった思い出もある。今のSLは煙突にフィルターなどつけて煙公害の対策などしているはずだけれど、やっぱり煙は多い。ま、煙を吐かないSLなんて、SLではない、という気分もあるのだらうけれど。

「白鯨」はようやく第一章に入り、小説らしい滑

り出しを見せる。イシユメイルというアラブ的な名前の風来坊、商船に乗り組んだ経験のあるとりあえずの主人公が捕鯨船に乗ろうと決めてニュ―ヨークから捕鯨船の母港であるナンタケットへ行こうとする。その途中での安宿探し、なにやら私の今の境遇と似ていないこともない。著者の饒舌に辟易しながらも、宿で同宿となったアフリカ土王国プリンス出身の銛打ちと仲良くなるところまで読んだ。13時01石州津和野着。



新山口でたもとを別ったSLが機関を停めて居座っていた。彼女はここと旧おごおり駅の間を1日1往復すること役目をまっとうする身なのだ。再会を喜び、しっかりカメラに収める。しかし、SLの黒い巨体、鯨に見立てた著述がどこかになかっただろうか。



津和野で途中下車し、ちよつと駅前をぶらりと見回ってみようと思う。本当のところは昼食のためである。私は健康のためもあって三度の食事はできるだけ規則正しく摂ることにしているのだけれど、それがローカル列車に乗ってきたことで弁当も使いにいく、今まで我慢してき

た。津和野では何が食べられるだろう。観光客が目につくひなびた駅前あたりをしばらくぶらぶ

らし、さびた小料理屋「石見路」に入る。「つわぶき定食」¥1100なるものをいただく。黒く丸い塗りのお重になって出てきた弁当風の定食は、つわぶき入り山菜料理ということだろう。ほんのりと色がつき暖かいたきこみまぜご飯がおいしかった。生ビールも入り、気分もよくそこを出て駅前へ戻る。テントにずらりと若い女性が並んで、観光客相手にパンフレットなどを渡している。私も仲間入りさせていただき、アンケート用紙なんかをいただく羽目になった。

7ページにもわたる詳細なテストだ。こんなことに巻き込まれている時間はない。公衆電話で益田の観光協会を呼び出し、今夜の宿を手配する。駅前の養老の滝2階、「とらや」というビジネスホテルで、4990円だと。食事には便利かもしれない。また現金にも余裕が出た気分で、駅前の津和野観光協会内の写真ギャラリーを覗く。リアルタイムで緊迫した現代世界を捉えている町出身の報道写真家の個人展だった。現代韓国の時事報道写真の数々を撮るのはさぞかし苦労があったろうと思うけれど、観光協会の中で、金を払って

鑑賞するにはちよつと違和感のある内容だった。そこを出て向かい隣の豪農風な庄屋蔵大建築めぐ安野光雅美術館に入る。氏は最晩年の司馬遼太郎の挿絵、特に前任者の死去に伴うライフワーク「街道を行く」の挿絵でわたしたちにはなじみとなった。なぜか宗教的な細密画を思わせるその画風は幅広く美しく、ポピュラーな楽しさもあるけれど、本質的に氏は真面目な性格なのだろう。スペイン旅行の沢山な作品に私はいささか食傷した。そこを出て、この町に寄った最大の目的である北斎美術館を探す。目抜き通りなのだろうけれど一般の生活があり、しもた屋も多い。こういったさりげない町を歩くのも楽しいものだ。しかし北斎はなかなか見つからなかった。辻を間違えて行き過ぎていたようだ。ほとんど駅前まで戻って探しなおし、見つけた。瀟洒なこじんまりとした町並みの中の小美術館。肉筆画、弟子の作品も含まれた版画などを見た。2階は写真展示が多かった。収蔵品をあちこちに貸し出しているらしいけれど、貸し出しすぎて展示品が品薄になっているのでは、とものたりなくも思った。北斎は贋作の

多い作家だというけれど、彼自身長く生きたということもあり、作品は膨大な数に上っているはずだ。せめてこんな観光シーズンには穴をあけずにわたしたちを実力で堪能させてほしいものだ。



駅に戻ると既に復路へ旅発つべくスタン・バイを完了したやまぐち号がもうもうたる煙をあげていた。ラッキーだ。私はこの旅で現役SLと三度目の出会い

を果たしたような気になった。

彼女の出立を見送ってから、私は益田行きに乗った。15時06発、益田15時44着。

### (5) 益田、人麻呂終焉の地

益田駅前はあまり観光都市らしくないこじんま



りした、よく言えばとりすま  
した感のない、親しみやすい  
顔だった。電話しておいたホ  
テルを探す。3度までビルと  
階段を間違えて、ようやく四  
度目に目的のビジネスホテル  
「とらや」に行き着き、バッ  
クパックを投げ入れて町へ出

る。鍵を預ける時に、貴重品はありませぬ?と  
念を押された。金は身につけているけれど、その  
他の持ち物も盗られたらやっぱり困る。しかし、  
その念押しは理由があった。あとから気がついた  
のだけれど、このフロントには基本的に人はいな  
くて、カウンターに置かれたままの鍵は、誰が黙

って入って来て使っても、チエツクされないようだった。こんなサービスの悪いホテルは初めてだった。

ともかく身軽になって、まだ日は明るい。天気もいい。最初にやっておくこと。海岸へ出て鴨山(島)のあったあたりを確認し、人麻呂を偲ぶこと。私の日常履くスニーカーは息子のおふるであって、すでにマジックテープが地から剥げかかっており、朝、家を出る時に強力ゴム両面テープでそこそこ補修してきたのだが、果たしてこの旅での過酷な使用になお耐えられるかどうか、疑問だった。駅の東、地下通路で山陰線をくぐり、益田川に直面したあとそれを右手に見、土手道に沿って海岸を志す。土手の下で自家のプラントーに水やりしていた六十を過ぎた紳士に、海岸の方向を確かめる。さあ、十五分位か？橋が三本あるから、その先に海が見えるよ、というのが紳士から得た情報だった。しかし実際はおおはずれ、橋は四本あったし、私の健脚をもつてしても十五分で海に達することはまったく不可能だった。

川は大きな鯉や少し小型のよく跳ねる魚など、ず

いぶん魚影は濃かったけれど、しかし釣り人はほとんどいなかった。途中、高校生らしい釣り人が二人、水門の取り入れ口から本流へ釣り糸をたれているのが見えただけだった。魚はいても、釣れるかどうかは別問題だというひともいる。しかし九州の汚れた川よりもまだこの川は悪くないように思えた。

三つめの橋で、その先の土手道が工事のために崩されており、やむなく私は川を渡った。もつとも、益田駅から大きくカーヴして海岸線へ沿おうとしている山陰本線の鉄路も見え隠れする川の東側へは、いずれ渡らねば目的地には行き着かないことがわかっていた。その先に更に一本の橋が見えていたし、すでに紳士に出会ってからも三十分が経過していた。タクシーを使うべきだったろうか。しかし余り部外者には説明しにくい目的と目的地（私にもはっきりとはわからない場所なのだから、タクシーの運転手には言いにくいことがある。もちろん公共交通機関などあるはずもないし、第一、自動車が行き着ける場所かどうかすらわからないのだ。

千三百年昔は、このあたりはどんなありさまだったろうか。鴨山島へ挽かれていく人麻呂はこの土手道を歩いていったのか。それとも舟に乗せられたのかもしれないが。

左手に河口のあたりが見えてきたけれど、海はまだ見えない。正面は小高い山になってその向こうにあるはずの海の存在を隠している。その中腹あたりに鳥居から石段のようなものが見えて、私は興味を覚え、土手道を降りて荒れた田んぼ道を突っ切り、その鳥居へ近づいていった。犬を連れた男性が近くを過ぎた。人家もあるらしい。石の鳥居をくぐって、暗い竹林の中の急な石段をかなり登り切ると、あっけなく人家や遊園地のある明るい団地に出た。その向こうに鳥居の主人である神社の本殿があった。この町内の、彼らの氏神さまなのだろう。とりたてて人麻呂との関係はなさそうだった。この地にある人麻呂神社は益田駅の西方、高津川のそばにあるはずだ。本殿の壁に思いがけなくダイエーの若いエース和田のポスターがあった。島根県人のイメージポスター。和田は



島根の出だったのか？

海へ通じるらしい下り道を進むうちに、沸くように包みを手にした子供たちが現れた。女性やら大人もいる。華やかな、高揚した雰囲気だ。新築の白木の家の骨組みが見えてきた。直前に上棟式のもち投げの儀式があったらしい。そのあたりはすでに河口の土手近くで、再び自動車道に出て海を身近かに見る。強い海の、しおのにおいが漂う。



日本海がすぐそこだ。

人麻呂が沈められた海、鴨山（島）の沈んだ海はすぐそこだった。砂浜が広がり、ダンブカー、シヨベルカーが砂を

日常で取っているらしい、落ち着かない現場だった。河口は突堤で囲われており、海からの波止めが万全であるようだ。沢山の漁船やモーターボートがその内側から川の上流にかけてもやってあり、それらを保護するための突堤なのだろう。海の向こうに遠く島が見えるが、あれは鴨島ではない。益田川の河口あたりは、小高い丘のような山が海際まで来て急に落ち込んでいる。

「水底の歌」上巻の記述では、鴨島の残渣である大瀬（海中の浅い岩塊）は今、海岸から千二百メートルの距離になっている。深度三メートルとい、海が荒れた時はそこに白波が立つという。人麻呂がそこへ挽かれていき、そこから沈められた時は、まだわずかな高さの山（島？）だったけれど、九百年前（万寿三年）の地震と津波でその島自体も一挙に沈み、その後も徐々に海岸から遠ざかっている。何も見えないわけだ。

私は海岸にそった道を更に進んだ。道は浜の高さから再び高さを増して、何か公共の試験場らしい

敷地の前で行き止まりになった。海に背を向けて黒い石碑が立ち、「柿本人麻呂終焉の地」と彫つ

てある。ここから海を眺めよ、というご託宣なのだろう。それでも余計な親切という以上の効果がその石



碑にはあった。わけもなく私は安心し、カメラにそれを収めた。時刻はちょうど午後5時00、駅から1時間かかって私はここにたどり着いたわけだ。

人麻呂はここに立って自分の流刑の地をまだ遠くに見ていたのだらう。そこですぐ処刑されるとは思わなかったかもしれないけれど、穏やかな気分ではとてもなかったはずだ。当時、流刑の島はそこでひとりでは生きることの出来ない、ただ野たれ死ぬしかない、小山のような島が選ばれたという。そこは無縁墓ばかりがやたらにある、小さな孤立した島だった。鴨山（島）もそんな海拔五メートルばかりの高さの無人島だったらしい。ただ、陸続きだった可能性もあるというから（だから島でなく山？）、そんな岬めいた島を見て、人麻呂は「また女と会えるかも知れぬ」などと、少時安堵したかもしれない。

万葉集卷二 人麻呂

既にあたりはゆつくりと  
暗くなりはじめていた。私  
は川土手を帰路についた。  
もう魚の気配はなかった。  
代わりに五羽一組のかる  
がもの家族が3セット、暗  
くなりつつある川面をゆ  
つくりと移動していた。



六時をかなり過ぎて、とっぷり暮れた益田市街へ  
戻った私は、駅の北側の開発途上の道で少々迷い、  
ようやく線路を越えて繁華街に入るころは結構  
疲れていた。何でもよかったけれど、たまたま目  
に付いた中華飯店に入った。焼きぎょうざはべた  
べたして余りよくなかったが、生ビールで流し込  
んだ。しかし野菜炒めはボリユームもあり、なか  
なか美味だった。ホテルに戻り、読書の気力もな  
く、早めに就寝。

(6) 雪舟、日本刀のうんちく

私は、朝は強い方だ。六時には目覚めて風呂に入りなおし（贅沢かもしれない）、ゆっくりする。

駅直行でなければ、旅先で朝早くからばたばたするのあまり効率的ではない。大抵の公共的なサービスは午前十時始まりだし、それまで門の前で待たされる惧れなしとしない。その十時までは当然の権利としてホテルでは部屋に居られるのだけれど、近所の部屋全々をひっくり返す掃除婦たちがどんどん身近かに迫ってくるのを感じると、性分として早く出なければ、という切迫した気分にもなるのである。

結局、9時前にはチェックアウトを済ます。サイドテーブルに置いてあった「まるごと島根プレゼントキャンペーン」でうまくいけば島根和牛一頭か、もしくは食器洗い機、または安来節の出前派遣（こんなのが当たったらどうしようかという不安はあるけれど）を当てようと決め、添付のはがきの裏にホテルのスタンプをもらうために、無人のロビーで呼ばわった。しかし出てきたのは例の



くて、ロビーの公衆電話を利用してくれと但し書きがあった) ホテルだ。しかしここであきらめるわけにはいかない。渋るおばはんを説得し、ともかく「とらや旅館」のゴム印を捺印させるのに成功した。

あとは島根県と益田をほめちぎる小文を書いて切手を貼り、投函するだけだ。しかし、当たるはずはないよね。ともかく籤運の悪い私なのだし。駅前のパーラーでモーニングサービスを頼む。和食ということだったけれど、サラダ皿と味噌汁にご飯という奇妙な和洋折衷だった。コーヒーの味も知れたのでそこそこで出る。正面のバス停から医光寺行きに乗る。私一人の専有で終点折り返しまで180円だった。雪舟庭で有名な医光寺は正面の古山門の古さ、大きさに驚かされる。これは益田七尾城の大手門を移したものだという。しか

し、いずれは修復しなければ朽ちて倒潰する運命なのだ。石造りでない日本建築の悲しさである。寺内に入り、雪舟庭を拝観させていただく。正面の鬼気迫るしだれ桜は、また開花の時期に来てみたい誘惑にかられる凄みがあった。離れの堂内欄間に飾られた多くのひょうきんな像が面白い表情だった。これらも随分古いものなのだろう。



医光寺を出てやはり雪舟庭のある時宗道場万福寺へ。時宗というのは仏教の宗派では異端に近い変わり物だと思う。うちの奥さんの実家がそうなのだけれど、葬儀のときはいくつもの鳴り物や踊りなどもある賑やかなものがあって、ちよつと驚いたことがある。もちろん万福寺は万寿の大津波（鴨山の島が沈んだ）で失われたこともあるという古い寺である。多くの仏像や曼荼羅などがある。その古さ、力の大きかったことを



物語っている。ここにも雪舟の造営したといわれる日本庭園があった。もちろん私にはその値打ちはわからないけれど、庭そのもののつくりよりも、その背景にある自然とのまじわり、山と林のただずまいに何かしら違和感を覚えた。借景といってもない、庭園そのものの奥の広がりには雑然としたものが感じられ、庭全体の調和を乱しているような気がしたのは素人のうがちすぎだろうか。

万福寺を出て、近くにあるという歴史民族資料館を探す。ごく古い町の公民館で、無料らしいので靴を脱いで入ると、なにやら雰囲気かものものしい。館員の世話役らしいのにどうぞ、どうぞと椅子をすすめられる。奥のほうで内輪の講演会のようなものが進行中だった。断ることもできずそれに加わる。しかし二十人あまりの聴衆が熱心に耳を傾けていて、どうやら、日本刀の目利きによる手入れの仕方、鑑賞の方法などが語られているようだ。訥弁の講師の手で今まさに刀が抜かれようとしている。抜く時は一気にせず、少しばかり抜いて、そこで止めたのちぞろっと抜くと怪我をし



ない、とか懇切をきわめたものだ。綿棒で打ち粉（細かい磨き粉らしい）をまんべんなく刀身にうち、ネルで油を拭う。時代劇の映画のシーンで見慣れた光景だった。刀の姿とひかりをしつかり眺めるには油は邪魔なのだ。ひ（樋？血みぞのことか）に溜まった打ち粉が先端から抜けて、大事な先端部にいらぬ磨きすじがつかないように、必ず先端近くで止め、こすり抜かないように、とか、なかご（こみ、ともいう。柄が嵌る刀の根元）はさびが出てても素手でこする程度にとどめ、決して磨かないのが常識だとも。めったにない行事なのか、ビデオカメラに撮っている関係者もおられた。なかなか面白く、あとで鎌倉刀の真剣に触らせていただいたが、旅行者がこれに加われたのは幸運とせねばならないだろう。

島根は古来、たまはがね（日本刀の原料鉄）の産地であり、伝統的な鉄鋼業が栄えたのは「ものけ姫」にもあったとおりだ。ちよつとここからは遠いけれど、安来はその中心で、日本の工具用特殊鉄鋼技術をリードする日立金属株の工場もあ

る。  
日本刀の講釈にも飽き、展示を見て回る。刀が多数あった。益田出身の文化人として徳川夢声が紹介されてあった。

(7) 柿本神社、慌しくも結構な幕引き

見るべきものは見つ。私は戻りのバスを背後にうかがいつつ来た道に戻った。結局停車場に立つとなかなか来ず、歩き出すと来る、ということの繰り返しで、気がつくとうとう駅前到達していた。なんとという健脚。駅の構内で帰りの便を確かめる。益田発13時07で東萩経由長門止まりから、小串、下関と山陰本線をたどる連絡があり、私は気に入った。それに決め、時計を見ると11時である。まだ2時間あるので、せっかくここまで来たことであり、柿本神社に詣でることにして、バス停へ向かった。しかし、数分前にその方面行が出



たところだという不運、嗚呼！。

結局タクシーをおごって柿本神社へ向かう。神社の正面に停めてもらい、長い石段を登ると正面に本殿があった。

この神社の起原は恨みを吞んで死んだ人麻呂の霊を慰めるために、水没する以前の鴨山に建てられた祠に発する。万寿の大津波で島が沈んだあと、そこに安置されてあった木像が流れ着いた松崎というところに再び神社が造営され、長くあったのである。その後、また水害があり、この、高津川の上流に移された（17世紀）という。

昭和52年、梅原氏の著作が発表された四年後に、高津川の沖合いで考古学的な調査がされ、神社の跡らしい石群の存在が確かめられた、と本殿の傍らに建てられた説明板が誇らしげに語っていた。梅原氏による神社の名誉回復の喜びがその字間に現れているようだった。

柿本神社に隣接して万葉公園という施設が作られてあった。その入り口の表札に書かれてある人麻呂の歌

笹の葉は みやまもさやにさやげども

我は妹思う 別れ来ぬれば



じつくりと自然と雰囲気を味わって散策すればなかなかよい雰囲気の自然公園だったけれど、生憎私には時間がなかった。タクシーの運転手氏が示唆してくれたバス停へ向かうべく静かな公園内をショートカットして、ようやく東口と書かれた駐車場へ出たけれど、バス停らしい道路は見当たらなかった

一寸あせりつつ車の少ない道を見当をつけて歩く。すでに十二時を過ぎていた。私の時間に忠実な腹時計が鳴り出す。ようやく道端に小さな大衆食堂「ときた」なるを見つけ、勇を鼓して入った。案外に店内は混んでいて、ちよつとやばいか。昼定食を急いで頼む。一番速い定番だろうと思う。一足遅れて四、五人の家族がなだれ込んできた。

ラッキーだったかもしれない。ともかくビールにもありつけ、意外と品数もありおいしい、てんぷら、刺身までついた上々の美食だった。終わりを見越してタクシーを呼んでもらう。気がつかないうちに店の外で気を利かして車を待ってくれた給仕のお嬢さまは、ジーンパンツのよく似合う、永作博美に似た美少女だった。気をよくして益田駅に帰着、ぎりぎりの12時55。

長門行き普通ワンマンカーは13時07定刻発進。山陰本線を帰途についた。帰路の楽しみは何といってもこの本線特有の身近な海岸線の景観だろう。カメラを構える暇もなくそれら奇岩の眺め、岬や荒磯が後ろへとすすっていく。それにしても、山陰線を走る車両は潮に焼けて、その寿命も長くはないだろうというほどに頻繁な海際の走行が続く。相席に座った同年代の男性とも会話がはずみ、おかげで、まったく読書の機会は失われていた。14時51分 長門着、小串行きに乗り換え。

そしてまた、これは絶対撮ろうと思っていた駅名

標。この旅の締め括りにふさわしい「長門古市」の次の小さな駅「ひとまる」。人丸というその駅の存在を、私は迂闊にしてこの旅の終わり近く、帰路についてから知った。

その不思議な駅名の由来を訪ねるのはまた、別の旅になるのだらうけれど。

おわり

PDF 編纂 あきら

